

東北大学農学研究所所長
宮城県民生活協同組合第三代理事長

吉田 寛一

【よしだ かんいち】

- 1912(大正元)年 8月1日、河南町
(現石巻市)に生まれる
- 1939(昭和14)年 京都帝国大学農学部農林経済科を
卒業後、農林省、大東亜省、農事試験
場に奉職
- 1947(昭和22)年 東北大学農学研究所助教授
- 1970(昭和45)年 東北大学農学研究所教授
- 1971(昭和46)年 宮城県民生活協同組合
(現みやぎ生協)理事
- 1972(昭和47)年 東北大学農学研究所所長
- 1980(昭和55)年 宮城県民生活協同組合第三代理事長
- 2009(平成21)年 12月8日死去

協同組合運動に
新しい地平を拓いた
“土壌の人”

豊かな土壌を提供してくれた

八月一五日の終戦をどこで、どのように迎えたか。百人百様の物語がいつせいに白紙に戻ったその日、吉田寛一は青森県十和田市の農事試験場にいた。

「虻を追うのに忙しい耕馬の手綱をとりながら牧草の種子を蒔いている丁度昼時に、息せき切って日本の敗戦の報を農夫が知らせてくれた。一生忘れない憶出である」

晩年に著した詩歌集『ロマンを求めて―人間・社会そして自然』の詞書に吉田はそう記している。さらに「敗戦〓終戦は私にとって治安維持法からの解放を意味した。本州最北端の地、青森県上北地方で生誕。」とも。

吉田の生地は宮城県河南町北村（現石巻市）。上北地方で生誕したのは、一九四五（昭和二〇）年八月一五日を再生の日と見てのことだろう。軍国主義の雲の下から抜け出したことに、吉田は快哉を叫びたかったに違いない。

昭和二三年、吉田は東北大学農学研究所（以下農研）に助教として赴任し、農民運動や農業経済の研究を進めていく。

農研の後輩である綱島不二雄が初めて吉田に会ったのは、東北大学入学後の最初の講義だった。農家の立場に立った実践的な話に惹きこまれ、綱島は友人とふたり、知的興奮の冷めないまま吉田の研究室を訪ねた。

吉田の講義の内容もさることながら、行動力にも感嘆した。当時綱島たちは学生

サークルをつくり、蔵王町の北原尾で援農活動を行っていた。ある夜、そこで開いた学習会に吉田が顔を見せた。学習会で話をするため一日に一本しかバスがないような山間部にわざわざ足を運ぶ。農研の教授である吉田には、学部や大学もバラバラの学生サークルを指導する義理もなければ責任もない。にもかかわらず山奥の開拓地まで出向いて熱心に農業問題を語る吉田の姿に、綱島たちは心を打たれた。

吉田は徹底して「与える人」だった。周りに集まってくる人たちへ理論を説き、実践を見せ、人と人を結びつけて農業や協同組合運動に新しい地平を拓いた。

「農協運動、生協運動、産直運動の豊かな土壌を提供してくれた。いや私たち後に続く者にとっては、土壌そのものと言っていい先生だった」

綱島は吉田の器量をそう表現する。

農業の未来を語り合った宮城農民大学

昭和四四年九月、鳴子温泉に県内各地から一八〇名もの農業者や農協職員、研究者らが集まった。吉田を学長とする「宮城農民大学」（以下農民大学）の第一回目の講座だった。

当時は、自主流通米制度や減反政策の導入など農業の大転換期で、みなそれぞれに切羽詰まった問題を抱えていた。山形県農民大学を主宰していた農民詩人の真壁仁と

協同組合短期大学で教鞭をとっていた美土路達雄の講演を聴き、熱い議論を分科会でたたかわせた。

吉田が朋友の美土路とよく話していたのは、「農民大学で農業論、協同組合論を実践の場に展開し、農協や生協の運動に新しい流れをつくっていこう」ということだった。

年に一回の開講だったが農民大学に対する期待は大きかった。事務局を担う綱島を中心に、農協職員や学校の労働組合の教職員などで運営委員会をつくり、月例の企画会議を開いた。会議はいつも日本の政治から農業と農協、生協運動、地域の課題まで話題が広範におよび、綱島は「二時間ぐらいのその会議が自分にはとても勉強になった」と懐かしむ。

南郷町農業協同組合の組合長から宮城県農業協同組合中央会の第六代会長に昇った駒口盛も、農民大学の運営委員の一人だった。駒口は『農業協同組合新聞』のインタビューで吉田のことを次のようにふり返っている。

「昭和四七年か四八年頃だったか、吉田先生から『いまからの農協の行き方は組合員の生活をベースにして考えなければならぬ』と言われた。(略) そうすると専業も兼業も、正組合員も准組合員も、その区分けは全然関係ない。農業協同組合だから『地域』はある。だから、その地域のなかの住民すべてが参加する協同組合運動はどうあるべきかを問え、ということです。」

農民大学はこうした地域特有の問題を話し合うため、角田市や栗原市などで分校を開催した。若い農業者たちはそこで思い思いの考えをぶつけあい、農業の未来を語り合った。

吉田の協同組合運動論は、こうして研さんを積んだ農民大学の卒業生たちの手で、やがて生産者と消費者が一緒に取り組む産直運動や、農協・生協同士の協同組合間協同へと結実していく。

農協の将来像に記した「産直」の文字

吉田はつねに在野にあつて農業者たちとつながり、地域農業の課題と向き合った。「仙南地区広域営農団地」もそのひとつだ。

昭和三八年、角田市内の七つの農協が合併して角田市農協（現JAみやぎ仙南）が発足。販売事業を検討する過程で、より広域的なまとまりを持つ仙南地区広域営農団地（以下営農団地）の構想が浮上した。構想は仙南地区区内ですぐに共有され、昭和四〇年二月、仙南地域農業経済圏研究会が発足した。

吉田は、片平の農研に研究会のメンバーを迎えて構想が農協運動として正しいこと、組合員の組織化が重要であることを助言するなど、専門的な立場から構想を支援した。脳裡には、当時、岩手県志和農協が試みていた有畜農業による複合経営があった。

たい肥による自然循環を活用した養豚事業で年間計画を立て、農業経営の安定を図るというもので、これを仙南地域に普遍化し展開しようというのが吉田の考えだった。幸いにも角田市農協の労働組合を中心に仙南地区には志に燃えた若い農業者たちが多数いて、吉田の提案に熱心に耳を傾けた。

そこで出てきたのが、生産者と消費者の連携をめざす「産消提携」だった。

「農協の先には消費者がいる。消費者の集まりである生活協同組合と農協が一緒に仕事をしていけば、農業にひとつの展望が開けるはずだ」

吉田はその連携を、生産者と消費者がともに「顔の見える関係」のなかで築き上げる「産直」と名付け、角田市長期計画の農協の将来像に書き入れる。吉田の提唱はその後、網島が「顔とくらしの見える産直」と表わし、現在へと受け継がれている。

窪田立士と産直運動

生協と農協の産直運動が生まれた背景には三人のキーマンがいた。一人は吉田、もう一人は宮城県民生活協同組合（以下県民生協）の内館晟、そしてもう一人が仙南農産加工農業協同組合連合会（以下仙南加工連、現株式会社加工連）の常務理事を務めた窪田立士だ。

窪田は昭和四一年に発足した営農団地の体制づくりに奔走するなかで、吉田が語る

有畜農業の複合経営や産消提携に共感し、農協改革への意欲をふくらませていく。当時角田市農協（現JAみやぎ仙南）職員だった窪田にとって、それは目の前の課題をどう解決していくか、ということと同義語だった。

角田市農協ではちょうどそのころ養豚事業の改善が論議されていた。養豚農家の増加とともに営農団地の取扱量もふえてきていたが、家畜を生きのまま取引する生体取引ではメリットが少ない。食肉センターはすでに稼働していたが一日の処理頭数はごくわずかだった。窪田は、カット肉処理の共同作業場を設置し、付加価値を高めて加工販売していく必要があると考えた。問題は販売先だった。

『みやぎの産直収穫祭』（コープ出版）には窪田の当時の心境が綴られている。

「うちとしては、養豚農家がふえ、規模も大きくなりはじめ、生産量はふえていたものの、どうも農家の利益が少ないので、何とかならないものかと思っただけです。お付き合いのあった東北大学農学研究所の吉田寛一先生に相談したんです」

吉田が紹介したのが、県民生協専務理事の内館晟だった。窪田は、内館のもとを訪れて仙南地区の事情や今後の農協の計画を説明し、畜産物の取り扱いを依頼する。

一方内館には、仙南地区との取引を単なる「産地直結」ととどめず、食卓の安心・安全や地域経済の自立をめざす「産直運動」として展開していこうとの思いがあった。少し長くなるが内館の思い出を『産消提携20年の情熱』（仙南加工連）から引用する。

「私が宮城県民生協をつくろうと思った動機はいくつかありましたが、そのひとつに農薬づけ、添加物を多用した食品を食卓から出来るだけ少なくしていこうという意志がありました。しかし、お金もなく組織も未確立で、私の意志を理解し、協力して頂ける人になかなか巡りあうことが出来ませんでした。そのとき、農業の再生を掛けて、農産物、畜産物の薬づけを克服し、地場流通を推進することに信念をもって取り組んでいらつしやる窪田さんを吉田寛一先生からご紹介いただきました」

当初は生協を一販売先として捉えていた窪田だが、もともとは農協改革への熱い志から始まった取り組みだ。内館の訴えは、砂に染み入る水のように胸の奥に浸透していったことだろう。窪田はやがて、自ら生産者と生協組合員の交流の先頭に立ち、内館とともに産直運動を力強くけん引していくようになる。

昭和四五年、県民生協と角田市農協のあいだでスタートした産直は、昭和四七年には仙南加工連が誕生して産消提携の窓口を担うとともに、吉田が提唱した有畜農業による複合経営の拠点となる。

現在、宮城の産直運動は商品ブランド名を「めぐみ野」とし、県内の多くの農協が参加する取り組みに成長しているが、端緒は吉田がその能力と強い意志を見込んだ窪田と内館の出会いにあったことを忘れてはならないだろう。

生協人、農協人が育った吉田学校

吉田は地主の長男だった。詩歌集『ロマンを求めて―人間・社会そして自然』には「昭和の農業・農村恐慌の時代、私の回りの東北農村には娘身売りは珍しいことではなかった」として詠んだ自由律の歌がある。

―生きて行く生きる本能だけが取り残されたこの村盲の鶏が日増し増えて来る

農村について多くを語ることはなかったが、ある日、綱島にこんなことを言っている。「農家は、社会的に下に見られているがそんなことはない。底力があって自然のなから深いものを学んでいる人がたくさんいる。我々はそういう人を発見していくことがひとつの大切な仕事になるんだ」

東北大学を定年退官後、吉田は郷里の河南町に住まいを移し、田畑を耕しながら生活するようになる。昭和五五年、県民生協の第三代理事長に就任したが、所用があるときはバスと東北本線を乗り継いで仙台へ出向いた。

傘寿を超えたころ、吉田を慕う農協や生協のOB、現職たちのあいだから「あらためて吉田先生に学ぼう」との声があがり、「吉田学校」というかたちで集いを持つことになった。吉田の家にみんなで集まり、お茶飲み話をしながら協同組合運動論や産直について議論を交わした。

「先生はご自分の考えを押し付けるようなことはしなかったので、みんな話の行間

を読むようにして、それぞれに思考を深めていきました。そういうなかで、多くの生協人、農協人が育っていったんです」

「吉田学校」は、吉田他界後も著書や協同組合関係の書籍をテキストに綱島をはじめとする「教え子」たちの手で続けられている。

吉田の提供する「豊かな土壌」はそうしてこれからも協同組合の人材を輩出していくのだろう。